

第2回松江市リノベーションまちづくりガイドライン検討委員会 議事録

■開催概要

日 時: 令和3年3月21日(日) 17時～19時30分

場 所: オンライン開催 (YouTubeLive)

出席者:

委員長: 大島芳彦(株式会社ブルースタジオ専務取締役)

委 員: 伊藤知恵(松江市中心市街地活性化協議会まちづくりコーディネーター)

梶田裕幹(ルポロ建築設計事務所代表)

坂田健一(株式会社サカタ代表取締役)

鷗 鶴 侑(中浦食品株式会社代表取締役副社長)

高橋翔太郎(高橋翔太郎建築設計事務所代表)

坪倉菜水(コクーン設計舎代表)

藤原真一(しまね信用金庫法人営業部長)

細田智久(島根大学総合理工学部建築デザイン学科教授)

事務局: 松尾純一(都市政策課長)

陶山知政(都市政策課計画係長)

立原 剛(都市政策課計画係専門企画員)

野々村智里(都市政策課計画係主任)

次 第:

1. 開会あいさつ(松尾課長)
2. リノベーションまちづくりとは(大島芳彦)
3. 講演「これからの不動産経営と公共空間活用のふか～い関係」(西村浩)
4. 検討委員会 第2回テーマ「わたしたちの水辺・わたしたちの公共空間」

■議事内容(4. 検討委員会)

大島委員長: 西村さんには色々なヒントをいただいたなと思います。今回は公共空間・水辺と、同じカテゴリーの中のものについて、日常の場として使いこなしていくことをテーマにお話したいと思っています。

市民が関われる場として捉える話や、公共空間が繋いでいる民間の遊休地や遊休不動産の循環を産むための仕組み・公共と考えるとそこには境界線はなくて、俯瞰してビジョンを定めていらっしゃるんだなと、そんな印象を受けました。

今日は委員の中の方でも色々な活動をされている方もいらっしゃいますが、西村さんに質問をされたい方もいらっしゃるかと思います。皆さん西村さんへの感想や質問もあればいただきたいのですが、本日はぜひ伺いたいのは、西村さんの話・今日のテーマをベースにいつも松江に対して思っていることや考えていること、こう目指していくと良いのではないかなど、ぜひご意見いただきたいなと思っています。どなたか手をあげて発言をいただけますでしょうか。昨日の市のイベントにご登壇されていた方から聞きたくなっちゃいますね。坪倉さん、昨日も盛り上がったかと思うんですけども、日常としての水辺の活用という観点からいかがでしょうか。

坪倉委員:ありがとうございます。昨日、水辺に行くといみんな五感が研ぎ澄まされて、空間をすごく広く感じるという話をしていましたが、結局公共の水辺空間ってすごく良い場所にあるじゃないですか。手に入れようと思っても、他には無いような、位置・広さで、そこに至る歩道や駐車場が整備されていたりして、それこそ民間が一番活用したいと思う条件が揃っています。どんどん貸してもらいたいし、制約を外してもらいたいと思いますし、全部は厳しくても、2m角だけでも貸してもらいたい、みたいなこともあると思います。

その反面、お祭りなら一時的でやりやすいし遊びに行きやすいですが、自分の事業をしながら常にその場で活動するということは難しい面もあると思います。そこで、もうちょっと緑地帯を辿って水辺にたどり着けるといいなという話をしていて、イベントに参加する人だけではなくて、地元でなりわいをしている方にも人手やお金が落ちるような一体的な人の流れを整備できると嬉しいし、頑張れるなという気がしています。あと、先ほどの西村さんの話ではキッチンを設けてやっていらっしゃることとかは自分の活動と重なる部分もあったのですが、そこで育った人が出ていくというのは魅力的で理想的だなと思いました。

大島委員長:すいません、坪倉さん少し声が聞き取りにくくてですね、、公共空間が良い場所にあるとおっしゃいましたが、水辺は街中の場合は基本的に公共のものですよね。その中で、いい場所・悪い場所というのはどういう見方をされていらっしゃいますか？

坪倉委員:景観だったり、アクセスの良さだったり、近くに駐車場があることだったり、広さ、そういった部分です。

大島委員長:なるほど。今白潟に限らず今回整備されるエリアのなかでどこが良くて、どこに目を付けていらっしゃいますか？

坪倉委員:単純にテーブルや屋台が出せるとかそのくらいのものでいいです。それが広くなれば集合体作りやすいということが生まれてくると思います。水面が見えるところですかね。

大島委員長:大橋川の南岸は全体的に良い場所な気がしますが、その中にもっと良い場所を作って欲しいということですか？

坪倉委員:公園なんかはもともとありますので、確かに先ほどの川床や船が着く港のような部分に市場を出したりとか、癖のある場所にしたり、橋の下なんかも仕掛けがいがありそうだなと思っています。

大島委員長:大橋川の南岸と言っても白潟公園まで捉えると結構な長さがあるって、同じ水辺でも切り取り方によって全く違う景観だと思います。そうするとなんとなく水辺って、漫然とした水辺ではなく、どんな水辺なのかを意識した上で切り取っていくと良さそうな気がしますよね。こういう人のための水辺、例えば恋人たちのための水辺などができそうな気がします。

坪倉委員:確かに暗い場所や狭い場所も含めて、色々な人のための水辺のバリエーションができると面白そうな気がします。

大島委員長:南岸は切り取り方によって全然違いますよね。伊勢宮の水辺、和多見の水辺、白湊公園の水辺、白湊の水辺と、みんな違うんですよね。

坪倉委員:そうですね。見える景色も全然違いますしね。

大島委員長:そういう見方も面白いですね。ありがとうございます。西村さんの話で、まちづくり会社の役割みたいなものが出てきましたけども、ぜひお話を聞きたいのは伊藤さんだったり、梶田さんです。梶田さんは実際に公共空間の活用を社会実験的に取り組んでいらっしゃるんですが、手応え・課題を感じているかもしれないので、ぜひ梶田さん・伊藤さんからお話をいただけたらと思います。

伊藤委員:では先に。坪倉さんからのお話からも続くのですが、水辺のエリアによって見え方や使い方がちょっとずつ違うっていう話で、今度4/4に源助桜の近くでライブをします。それも、市に相談して許可をいただいて行うんですけど、クレームが出たら中止としています。他のエリアだとちょっと音を出しただけでクレームがきてしまうのですが、場所によって火を使って良い・音を出して良いとわかれば、使う人たちがもっと使いやすくなるだろうなと思っています。

今なんとなく思っているのは、昔から住んでいらっしゃる方が多いエリアでは音出しをしても温かく見守ってくださいますが、マンションなどの新しい方が住まわれているエリアでは整行列の練習などにも慣れておらず、クレームがあったりします。宍道湖沿いのエリアで、白湊公園・源助桜の公園・岸公園・市役所側の公園のルールがわかりやすくなると使いやすいなと思います。4/4は実験的に音出しを試みる予定です。

大島委員長:イベントのタイトルはなんですか？

伊藤委員:タイトルはなんだったかな。もともとそこに蔵があったんですけども、ネオ公民館という名前でイベントスペースにしていた人がいて、蔵が壊された後に自分たちのイベントを復活させたいなという想いがあって、蔵があった時に集まっていた人たちとマルシェとライブをするという予定になっています。

大島委員長:これって源助公園のところなんですか？

伊藤委員:源助公園から初音寿司のエリアの方です。

大島委員長:あのエリア比較的古い方が多いエリアですね。そこだと意外と良さそうですね。

伊藤委員:前まではもともと蔵の中で音を出していたので、建物が無い状況での音だと、ドラムはダメかな・アコースティックならいいかななど楽器の加減も気にしています。今回は静かめのバンドで実験で試みて、将来的にはドラムもやろかなと思っています。

大島委員長: 音って結構センシティブで、その音の大きさは実は関係ないと思っています。その音の意味や、イベントが共感を生んでいるかみたいなのが大事で、どんなに美しい音でも騒音にしかならないんですよ。さっき西村さんの話の中で、「エリア勝手にビジョン」のお話がありましたが、そういうものが地域の人たちに共有されていて、そのためのイベントですとわかってもらえれば、音も許容されるのではないかなと思います。

西村氏: やっぱクレームが来る人を一番仲間にするべきなんですよ。仲間になったらクレームにならないので、巻き込むしかないと思う。巻き込んでから一緒にやる方がいいかなと。説得するとどうしてももうまくいかないの、一緒にやれる仲間としてどうやるかを最初に話した方がいいね。マンションに住んでいる人たちだって、自分たちが暮らしやすいまちになってほしいと思っているはずだから、そういうのを聴きながら仲間になっていくフェーズとした方がいいと思います。共犯者になるというか。そんな気がしますがどうもね。

大島委員長: 梶田さんは活動を続けられていてどうですか。

梶田委員: そうですね。僕たちも今空き地になっているところで飲食を出したりしていて、人が集まりながら焚き火をかこめる場所をやっています。だいぶ暖かくなってきて桜も咲きそうなので、また違ったものを出したり、夏に向けてビールを出そうかなと思っています。僕たちもやり始めたばかりでまだ告知もあまりできていないのですが、商店街の会長さんにもお声がけはしていて、何か手伝えるところがあればとおっしゃっていただいているところです。

大島委員長: 梶田さんはあの見える位置で色々とやられていて、今、西村さんの言葉を借りれば共犯者を少しずつ増やしているなと思うんです。ふらっと寄っていった共犯者たちもいますよね。お父さんここで、ホットワイン飲んで行きましたよね、みたいなね。一回でも立ち寄ったら文句言えなくなってきますよね。

梶田委員: 結構リピーターも増えています。僕も違った目線でいうと、大橋の上で何かできないかなと考えています。ここは県道になるのですが、ちょっとハードルが高く、安全面の確保から警察の申請や関わり方も課題だなと思っていて、西村さんがどういう風にされているのかをお聞きしたいです。

西村氏: 変な話、動きながらやっている部分では何も文句を言われません。移動しながら売ってる分には問題なくて、止まっていると占有と言われちゃいます。ルールでいうとね。ずっと動いていればいいです。橋の上は河川か道路かどちらかなんです。なので、道交法がかからなかったりして、橋の上で路駐している方が多いんですよ。結構橋の上ってトラックが止まったりしていて、道路じゃなくて河川空間だから、道交法の対象外になります。意外と橋によって管轄がどちらかになるので、よく見た方がいいですよ。あと、坪倉さんがはじめにお話されていた河川敷を使いたい話については、岡崎ではスノーピークの関連会社で河川敷の指定管理を請け負っている会社があります。ここでは、河川敷をオフィスに使ったり、テントをはってキャンプをしたりしていて、河川敷

も行政と話し合って管理の仕方を話し合っていければできるはずですが。ただ、河川とか橋が難しいのは、特に河川管理通路が難しいよね。大きな橋の場合河川管理通路が横にあって、そこはだいたい車がガンガン通るのよね。それをいかに車の通行量を減らすのかということと、車が通る道をまちの背後に回すとか、いろんな仕掛けをすることによって、実は岡崎は背後の敷地と河川敷を車が通らない道にすることによって繋がったんです。

そうすることで、背後の建物と河川敷を一体的に管理するということで、スノーピークが指定管理を受けているといった風に日本の中にも事例があります。事例を持った上で、行政に話をし、行政も事例をみて、どうやってやったのかを勉強すればできると思うんだよね。まずはそういうことをやりたいと妄想できるかどうかだよ。

大島委員長:盛岡の木伏緑地も河川を指定管理でやってますよね？

西村氏:そうそう、細長い敷地を。できないことはない。

大島委員長:さあ皆さんいかがでしょうか。はい坂田さん、待っていました。水辺の一等地に不動産を所有されているオーナーさん坂田さんからです。

坂田委員:今日西村さんの話、すごく参考になりましたありがとうございます。私も住んでいる場所が梶田さんの家の近くなのですが、宍道湖にすごく近い場所に住んでいて、去年コロナがあった時に、夜や休みの時に宍道湖に人がすごく多かったんです。宍道湖に人がいたことを考えると、日常的にあの界隈に価値を置いているのはすごくわかるんですけど、他の選択肢がないから多くなったのかなと思っていました。

その時に、今になってよく見るとウォーキングをする人が必ず宍道湖の周りをよく歩きます。だいたい10kmも歩くと、宍道湖から南の方まで回れたりします。その時に、よく大島さんが「発明を」とよく仰るんですけど、歩くとか健康というテーマでどういった装置があったらいいのかというのを建築の目線でこういったものがあったらいいとか、建築以外の目線で何か参考になるものがあれば教えていただきたいなと思います。例えば、トイレがあったらいいよとか、途中で健康ジュースが置いてあったらいいよとかですね。

西村氏:なるほど、何だろうね。歩いて巡る途中にあったらいいねという意味になるかはわかりませんが、やっぱり河川のアクティビティを誘発する道具置き場・倉庫的なものがあるといいなと思いますね。キャンプ用具やカヤック・SUPが置いてあったりとか。水辺のアクティビティというと道具を持ってこないといけなかったりの話がありますが、そこにあれば持ってこなくてもできるじゃないですか。そうすると水辺のアクティビティが誘発されて、活動が起こりやすくなりますよね。それが歩くこととどう繋がるかはわかりませんが、そういったところがあったらいいんじゃないかなと思います。

大島委員長:それ僕も答えたいんですけど、健康って興味を持った時に、ストイックな方向で達成しようとする方が多いんですよ。宍道湖の周りを走っている方も結構自分を見据えな

がら走っている方が多いと。そういった方達同士の交流がもうちょっと生まれるといいんじゃないかなと思います。自分も走る人間だと、ちゃんと言えるんですけども。

どうやったらそれが可能になるかという、ある価値観は共にしている訳だから、対話するきっかけがあるといいよね。ゴール地点を定めたりとか、散歩している人だったら休み休みベンチに座りながらもあると思いますが、そうすると要所要所に木陰やベンチの溜まり場・さっきの道具の倉庫があるとその人たちが選んで立ち止まれるような場所がある。それがさっき坪倉さんとした話にもありましたが、それがそれぞれの場所の価値観、ここはこの景色がいいとか、ちょっと高い場所にあるとかを持っていると、そこに座っていることがまた一つの価値観の共有になって交流が生まれると思います。

暑い日には木陰に入って、「暑いですね」と話あったりだとか、「夕日が綺麗ですね」とかの会話が起きたりですね。建築的観点から見た時にはそういった場所があるときっかけになると思います。

では私の方から鷗鵜さんどうですか。いつも鷗鵜さんは新鮮な顔をして聞いてくださるので、ありがたいです。西村さんの感想や、鷗鵜さんのご意見をおっしゃっていただければと思います。

鷗鵜 委員: 西村さん今日はありがとうございます。やはりどのエリアでも、グイグイ引っ張っていく人が必要だと改めて感じました。普段私も色々な飲み会にいくので、駅や橋周辺に行くのですが、宿泊の旅館や居酒屋では水を見ながらという場面が松江らしいなと感じています。実際カヤックなど、水辺の上で何かすることができたら楽しいなと思いますけれども、見るという場面を松江は作っているのかなと今感じているところです。

あと、私の背景にしじみ漁師が映っていますけれども、私しじみ漁師と共に専門会社を作っておりまして、実際大橋川にはしじみ漁師が300人いて通勤路になりますので、朝になると一斉に漁師さんが漁に出たりしています。子供の頃から思っていたのは、漁師さんの場所なので、あまり近づくと危ないよというイメージがありまして、そのイメージをどうやって崩していった、本当は子供たちが安心して遊べる空間を画一できると面白いなと思っていました。

大島委員長: なるほどね。今日の西村さんのお話では、とにかく遊び倒していたじゃないですか。あの視点って、そっかまちってこう見えるんだ。と観光客よりも地元の人の方が新鮮に感じたりするんだよね。まあその時に通勤路なんて話があったけども、大橋川ってある人には日常で、ある人にはただの川べりですよ。例えば鷗鵜さんもそういう会社をやっていたら、船に乗って川の上から北・南の景色をみる訳でしょうね。その時に、漁師さんじゃない人からみる松江って、なんかありそうでしたか。

鷗鵜 委員: めちゃめちゃ綺麗です。川から見ても町並みは綺麗です。

大島委員長: それは岸辺からみる川・対岸じゃなくて、水面からみる松江は全然違うよってことですよ。

鶴 鵜 委 員:そうですね。あと県外の人たちに結構言われるのは、水面との距離が近いと言われますね。その辺は私も日本全国あまり行かないんですけども、確かに近いなと思います。

大島委員長:確かに。いいんだか悪いんだかはわからないけれども、夜釣りをしている人が川に入り込んでやっているじゃないですか。いいな、楽しそうだなと思うんですけども、道を歩いてそのまま川の中に入って、浅さもあるのでもっと色々な人が入って楽しめる場所でもいいのかもしれないですね。

西 村 氏:やっぱり湖だから圧倒的に穏やかですよ。海と違って波も立たないし、すごく穏やかな風景だと思います。ただ、そういう意味でいうと子供が遊んでいるということと、漁としての宍道湖ならではの生業みたいなものが、混在してもいいのか、それも棲み分けをして子供たちが水辺に親しんで、水の楽しさや松江の価値を水を通して知るみたいな場所は別のところ、例えばお堀とかに回して、棲み分けをきちんとするという戦略も多分必要なんだろうなと聞いていて思いましたね。

大島委員長:ちなみにあの、堀川ってなんていうの、船がいくわけだけど、それ以外にSUPやっている人とかっているんですか？それともそもそもやっちゃいけないのか、どっちなの。これ、坪倉さん知ってるのかな。

坪 倉 委 員: SUP、SUPやってる人はいます。

大島委員長: ああ、じゃあやっちゃいけないわけじゃなくて。

坪 倉 委 員: 宍道湖の美術館エリアでも、あそこを発着点にしていたりですとか。

西 村 氏: やってるんだ。

坪 倉 委 員: はい、ヨットだとかも出てますよね、坂田さん。

大島委員長: 坂田さんもよく遊んでる？

坪 倉 委 員: 坂田さんが詳しいと思います。

坂 田 委 員: SUPのインストラクター(の資格)を去年、取りまして・・・

大島委員長: ああ、なんだ笑 そんな近くに(やってる人が)いるのか笑

坂 田 委 員: あのと、今、昨日ちょうどSUPのメンバーが源助公園に来てくれて、話をずっとしてたんですけど、水面利用の協議会があって、宍道湖漁協とかそういった堀川遊覧船とか、いろんな団体がですね、いわゆるルール作りを、今作っている最中です。遊覧船が通っているときは船の航路を障害しない、あとはしじみっていうのは毎日漁ができないの

で、休漁日に対してはこういう使い方をしましょう、このエリアは浅瀬が多いし岩が出ているから、気をつけようというルートマップを今作るとか、今そういった協議会をされている最中だと思いますので、またいずれ出てくるとは思います。また別の団体とか、協議会として。実際そういった地ならしはできていると聞いています。

大島委員長: 今んとこそれがまだ確立されていないから、勝手にやっていると怒られたりするのかな。

坂田委員: 全然。怒られないです。

大島委員長: あ、怒られるわけじゃないけど、出る以上はルールをちゃんと確認が、自発的に決めた方がいいんですね。

坂田委員: 合意形成はもう4,5年、もっと長いところから地道にやってらっしゃるみたいで、なので、この前もSUPで来た人、昨日ですけど、来たメンバーは、白鳥号ってあるんですけど

大島委員長: 遊覧船

坂田委員: 白鳥号の船長が手を振ってですね、「今日もやっとなるか？」という感じで

大島委員長: ああ、そうか笑

坂田委員: それがあると、事故があったときに船で救助とか、色々してもらえるので、そういった今、なんていうんでしょうね、顔合わせっていうのは地道にやっています。

大島委員長: うん、なるほどね。あの、細田先生、ぜひ中身の件でもいいんですけども、この松江の街中で水辺をいかにこの日常生活の中で取り込んでいか、みたいなところにヒントがあればぜひ教えていただきたいんですけども。

細田委員: なんかあの、白鳥号の話がさっき坂田さんから出て、うちの学生が卒業設計で宍道湖遊覧、大橋川から出て宍道湖まで回るやつの発着場とかそういったところの、設計提案を作ろう、ということをやったことがあって、その学生と一緒にそれ(遊覧船)に乗って、宍道湖をずっとって戻るまでやったんですけど、やっぱり橋を一つずつくぐる、遊覧船から潜るっていう風情は良かったですね。

かといって、それに乗っているからといって、なんか、水辺から賑わいを感じるとか、なんかそこで何か、なんていうのかな、水は水、陸は陸、みたいな形で切り離されているのはちょっと残念だったかなって思いましたね。学生なんかはそれを近づけようという提案を作ろうかってことを頑張っていたような気がしましたね。

それと昨日、昨日ですよ、大橋川の北側の歴史的な建物を一般公開して、それ、坪倉さんのYoutube見る前に僕も小一時間でしかけど、昨日回っていて、ああいうイベントはすごく楽しかったし、建物を見ながら、またその建物の隙間や裏から、大橋川が見えるっていうのは松江ならではの景観だなっていう風に思いました、

なんでそれ行ったのかなって思うと、建物を見るからあれなんですけど、建物もなんだけど、「あの人来てるかな」とか「あの人もいるかな」とかっていう期待感と、「一体どんな人が来るのかな」という期待感と、その両方の興味というのが自分の中にあって、やっぱりそういう、今日西村さんに色々実践的なお話をしてもらって、なんかそういう、「あの人はいるのかな」「どんな人が来てるのかな」という興味を喚起させるような、そういう取り組みだと足を運んでみたくなるのかなっていう風なことを、ちょっと昨日感じたというお話をしました。

大島委員長:昨日その公開されていたのは、京店あたりの

細田委員:そうですね、京店、東本町、東茶町ですか

大島委員長:ああ～、なるほどね

細田委員:すごく良かったですよ。2階まで見せて頂いて、まあ足立先生っていう地元で有名な先生がガイドもされていて、すごく楽しかったですね。市役所の方もたくさん来られてたし、色々ああだね、こうだねって言いながら全然知らない人と一緒に建物を、感想を言いあったりもできたんで、すごいいい取り組みだなって思いましたね。

大島委員長:やっぱり水辺って、そこに行ってみたいって思うとか、そこに佇んでみたいと思ったそのときに、その場を居合わせている人ってある価値観を共有してますよね。

細田委員:まあそうですね。

大島委員長:だからなんかその、水辺で何かやりますよって言ったときに、先生がおっしゃっていたように、誰が来るのかなっていうのはそういう好奇心なのかもしれないし、意外と街中でそう思わせてくれる場所って山とかあれば山もそうかもしれないけど、平地でっていうと結構街中ど真ん中にそういう人の価値観をいい感じにフィルタリングしてくれるような、そんな装置が水辺なのかもしれないですね。

細田委員:そういう場づくりにすごく大事だと思いましたね。その時もなんか、女子高生かなんか若い子が三人くらい、大橋川に降りる階段あたりに、三人階段に座っていたんですよね。「ああ、絵になるなあ」と思いましたね。

大島委員長:それは大橋川の北岸の方ですね。

細田委員:そうですね、北岸の方。またああいう場が少しずつ、計画はされていると思うんですけど、今回の改修で。そういう絵になるスポットみたいながあると、こっちもちよっと嬉しくなるといふか。

大島委員長:なるほど。今大橋川の川辺で言うと、北岸側に絵になる場所が多いですよ。

細田委員: まあそうかもしれないですね。

大島委員長: ですね。やっぱり東本町のあたりの柳の並木とかね、景観的にはそうなんだけど、これから南岸どうなんのかっていうのは、誰もよくわからないっていう感じがあるので、ある意味自由だとは思んですけど、北岸が持っているさっきの京店の裏っていうのは、あそこは川べりは歩けないんだけど、だけどあそこにせり出した古い木造の建物から見る景色とか、それが水辺にセッティングしている姿というのは、あそこの特殊な、柳並木とは違う良さがあったりするから、そういった水辺を楽しむ、バリエーションというのはすでにあるんでしょうね。

あの一、どうですか、藤原さん、高橋さん。

藤原委員: すいません、先ほど西村さんのお話、とても面白くてですね。さっきの勝手にビジョンですか、エリアマップ、私は建築は当然素人なんですけども、いろんなやる気をもったり問題意識をもって、この委員のメンバーさんもそうなんですけど、取り組んでいく上で、私金融の立場からお話しさせていただくと、なんにもないところに投資をしていかれる時にですね、どうしても今回みたいに民間が事業としてやっていく場合に、そこに経済価値をどういう風につけていくのかっていうのを判断するのってすごく難しいところで、

ただ、先ほどの西村さんのように全体の将来構想というか、エリアマップというか、実現可能性はわかりませんが、こんな街になっていくんだよっていうのがあって、その中の過程の一つだという風に見えると、投資する側というか、ご支援をさせて頂く側とか、いう風な立場で見ても、イメージを掴みやすいというかですね、最終的にシナジーが出てくる可能性も見え、ということで、事業される方もそうですけども、資金を応援する側にとっても非常にいいんじゃないかなという風に感じました。

その上で、経済活動とかまちづくりしていく中で、人が自然と集まる場所としてのパブリックスペースの意味とか存在意義ってやっぱり大きいな一と感じました。以上です。

大島委員長: なるほど。そうですね、その投資する基準として、金融機関の方々にとってもどれだけその事業が何かを成し遂げるであろうかっていうことのイメージが付くかどうかの方が大事じゃないですか。世の中にいいことやってるから融資しようっていうことじゃないですよ。当然今、SDGsの観点も含めて、あるべき事業っていうのはあるんだろうけども、そのビジョンがぼんやりしすぎていると、いわゆる小さなマイクロビジネスに対する融資って判断できないですね。

だから、あるビジョンがあれば、判断もできるということもあると思うし、実際、地元の信用金庫さんも含めてですね、その地域・自治体のリノベーションまちづくりのビジョンと足並みを揃えて、リノベーションまちづくりの文脈の中から生まれてくる事業に関して、まずはそれを前提に話を聞いてくださるなんていう、そういう体制ができている自治体も実際あります。

今回のリノベーションまちづくりガイドラインっていうのは、勝手にエリアビジョンってほどじゃないんですけど、松江市全体のまちづくりビジョンっていうとなかなか手が出ないところを、エリアを絞り込んで、先ほど冒頭に私が申し上げた通り、橋南の、橋南もさ

らに絞ってJRから北側、とかね、東西まである程度絞り込んでいくと、意外と「そこでなければ」っていうちょっと偏ったビジョンが生まれてくるんじゃないかなと。いい意味ですよ。そうすると、信金さん金融機関さんとしても、そういうまちを作るっていうことであるならば、こういうことができるんじゃないかっていうのを考えてみるといいんじゃないかなっていうのを期待しているんですよ。

西村氏: 多分あれですよ、さっき、クリークネットの描いた絵のことをおっしゃってくれてましたけど、今のところ勝手に民間が描いて「こうなるんです」「こうしていくんです」っていうビジョンを描いてますけど、多分そこに「行政はこういう役割で規制緩和を考えます」っていうことがついてくると、圧倒的に銀行の信用力高まりますよね。藤原さんいかがですか。

藤原委員: それはそうだと思いますね。最終的に所有者さんのご了解がないと当然できないことですから、勝手に図を書いているだけなので、そこに将来のビジョンの、構想を担保する何かがあると、当然実現力、実現可能性は高まってくると思いますので、それは判断材料になってくると思います。

西村氏: そうですよ。例えば、あの絵の中の1つの物件を、どなたか、例えば坪倉さんがやろうと思ってますと。やろうと思っているんだけど、この私が描いた全体のビジョンの中で、河川利用については行政が規制緩和してくれることになってますっていったら、めっちゃ信用力高まりますよね。

藤原委員: そうですね、当然、何ものなれば、ツッコミどころで「それ行政との調整についているんですか」とか当然、実現不確実なものに対する先行投資はやっぱリスクが高いので、これは事業をされる方にとってもリスクの高い話だと思いますので。貸し手側ばかりじゃなくて。

西村氏: そうですよ。僕よく言うんですよ「インサイダー取引」って言うんですよ。「まちづくりのインサイダー取引」ですよ。先に行政がやるって言うことを嗅ぎつけておいて、先に不動産を手に入れておくって言うことですから。やっぱりまちづくりに先に関わる方がインサイダー取引ができるんですよ。

だからそういう、民間の動きが先にあって、行政が後からついてきた方が、すごくインパクトが大きいというか。行政がやるって言ってから不動産に手をつけようとする、多分家賃が高くなったり、購入価格高くなったりするんですよ。だからそこを上手に民間の人が逆手にとって、ちょっとリスクは負うんだけど、やった方がいいのかなって僕は思いますね。

藤原委員: ですね。その観点でいくとやっぱり事業をやっていく上でヒト・モノ・カネの3方向から見た、見方というか事業の実現性って必要なんですけど、やっぱり松江の中でも変わったことやってるなっていうものを見渡すと、いいプレイヤーがいたり、いいアレンジャー、人とモノをつなげているいいアレンジャーなりプレイヤーがいてですね、多分今回の委員のみなさんもそうなんですけど、この人たちにネットワークがどんどん、私、口が悪

いので、なんか変わったことやろうとかと思うと「のぼせもん(情熱が多い人)がいないといけない」とかよく言うんですけど、そう言う人たちがネットワークで繋がっていくようなことがあるといいなって、そんなキーパーソンがどんどん出てくる、それが連動してくるようになるといいなって感じてます。

大島委員長:ありがとうございます。実践者の話として高橋さんのお話も伺いたくって、高橋さんも今、活動している拠点自体が、言ってみれば、水辺ではないんだけど水辺に近いような位置でやられていて、一定のこの時間を経ていて、そこへ仲間を巻き込んでいないですか。

多くの人、今どれくらいの広がりを持っているかわからないんですけど、今日西村さんの話でも、その巻き込む仲間を増やしていった場所だと思うんですけども、その中で感じてらっしゃるまちに何かアクションを起こしていくことに対するお考え、であったり、むしろあの場所から外に広がっていったりしているのかも気になる。向かいの小さな公園の存在もずっと気になってるんだけど、何か、お願いできますか。

高橋委員:西村さんのビジョンの表現の仕方とか、行動力っていうところがすごいなと思っていて、そこはやりたかったことがあればどんどんそういうふうに動かないといけないのかなっていうのはすごく感じました。

今、事務所が末次町ってところで古民家を改装しているんですけど、前の公園っていうのが、昨日、広場ニストの方の背景がまさにその公園だったんですけど、近くには川があって、そこはカヤックですかね、練習場になっているんですね。その風景とか見ていると、この水が近い空間っていうのはすごくもちろんいいんですけど、

自分も元々水辺があるところがすごく好きで、最終的に事務所もそっちの方にとにかく、水辺の見えるところだったり近いところとか、家もそうなんですけど、そういうところに行きたいなっていうところはすごくあって、今、宍道湖と大橋川あると思うんですけど、基本的にはまだ水辺との距離は遠いとかかなと僕の中では思っているんですよ。

県立美術館のところっていうのはまさに(水辺に)近い状態で、すぐに釣りができたりとか、水辺と距離がすごく近いので、すごくそういうのはいいなと思うんですけど、でも大橋川の場合、洪水とかの問題があったりして、だからまあちょっと距離が離れているのかなとは思っています。

でも実際はなんかランニングする人とか散歩する人も(水辺が)近い方がいいのかなと思っていて、なんですかね、なかなか自分も水辺の公共空間に関わらせてもらっているんですけど、できる限り近い方がいいなと常に思ってますけど。

大島委員長:高橋さんが、松江の街中で一番好きな水辺、一番狙っている水辺ってどこですか。

高橋委員:そうですね、狙っているのはやっぱり、今は宍道湖ですけどね。

大島委員長:どこから見た宍道湖？

高橋委員:見ているというよりは近い状態が好きなんですよ。

大島委員長:宍道湖の湖面？

高橋委員: そうなんですよ。なんか、小さい川っていうのを使うイメージが今日までなかったんですよ、カヤックで。西村さんがやられていることですが、そういうイメージがなくて、自分のものじゃないですか、川が。ほんとに他人のものであるイメージがあったので、「あ、こうやって使うことも可能なんだ」というので今日はすごく可能性が広がったのかなあと思いますし。

僕、松江北高校ってところに通ってたんですけど、グラウンドの横に小さな川が流れていて、そこも浅いんですけど、結構魚見るのが好きで、ほんとに、川とか水辺があると大体魚とか探しちゃうんですけど、子どもも浅いところだったら遊べると思うし、身近な空間になり得るのかなと思うんで、そういうものは今後松江は活用できると思って、自分の住処だったりとか事務所としても探すのもありなのかなって可能性は増えました。

大島委員長: なるほどね。松江って水辺って言葉が一番似合う、水辺先進都市と言いましたけど、やっぱり水辺って十把一絡げに全部一緒じゃないんですよ。だから、ここにお集まりの皆さんも水辺っていった時にイメージする水辺って全部違う気がして、その辺りも大事にしていくことなのかなって気がするんです。

だから水面が近いって言ったけど、それも人によって違うんだろうなという気がしますね。僕自身も、今こう、どこが松江の水面で、水辺で好きなのかなって言われたら、僕はやっぱり、東本町の柳並木、あそこから見る大橋川とその先の宍道湖の夕日っていうのは僕は大好き。

そこに沈んでいく大橋川の橋が向こうに見えてね。そのシルエットが。それが一番好きですね。で、それはわざわざ行かなくても近寄ってきてくれる感じがあるんだよね。宍道湖の湖畔はまだ僕はちょっと遠いなって気がして、わざわざ行かないと受け入れてくれないというか、そんな存在なんだけども、僕はそんなふうに思ったりするんですよ。

もうそろそろお時間が迫ってきたんですけども、日常の中の水辺ってことをこれからね、考えていきたいし、何かその活用に一石投じることがこの後みなさんの意見もさらにいただいて考えていきたいと思うんですけども。どうですかね、一人ずつ、自分の一番大好きな松江の水辺ここって言ってもらえます。ちょっと興味深い笑

どうですかね、細田先生から行こうかな。松江でどの水辺が一番好きですか。

細田委員: あれなんですよ、島根大学の横にある川があるんですけどね、何川だったかな・・・そこは割と護岸も緑地ですし、やっぱり、ちょっとこう、水辺にも近い、水は綺麗じゃないんですけど、結構近寄れる感じで、これやっぱり朝酌川なのかな。そこはね、そぞろ歩きするのに結構いいですね。

大島委員長: それちょっと後でどこだったか教えてください。(後からコメントがあり、「朝酌川の加羅加羅橋」のことだった) 鷗鷯さんどうですか。

鷗鷯委員: 私はほんとに、いつも東本町歩いていくときは、ほんと大島さんと同じロケーションが好きですね。

大島委員長: ああやっぱね笑 2票入りました。藤原さんどうですか。

藤原委員: 私も、そんなに歩いてウロウロしているわけじゃないんですけど、夜歩いている方が多い方ぐらいなんですけど、売布神社の裏の北側のところから対岸を見ているようなところの夜とか好きですね。新大橋よく渡るんですよ歩いて。まあ飲みにですけど。あのあたりの景色ちょっと好きですね。

大島委員長: それはほろ酔いで見る景色ですねきっと笑

藤原委員: それそうかもしれないですね笑 それと、東本町の今ちょっと実はあんまりないんですけど、屋形船が出たりもしてるんですね。あの船乗っている時の水面との距離感って全然陸地、護岸から見ているものと全然距離は違うんで、水面の上から見る川とか水とか、僕好きですね。

大島委員長: なるほど。それもっと多くの人に知ってもらいそうですね。梶田さんどうでしょうか。

梶田委員: 僕の中で、過去に一番綺麗だと思ったのが、鷺鷥さんと同じ、先ほど言われていたことなんですけど、水辺からの景色で、僕実は高校の頃までボート部で、漕艇部なんですけど、朝練で朝一番早い7時くらいの練習で、水辺が凧の時の、川からの景色だったり、朝日を見たりっていうところが僕の経験上では一番好きなので、いろんな方に体験して頂けると素敵ができれば素敵だなと。

大島委員長: 漁師さんと同じくらい一番いい時間を知ってるんだろうね。伊藤さんどうですか。

伊藤委員: 私、鳥が好きなんですけど、水鳥がすごく宍道湖も大橋川も多いんですけど、私が好きなのは天神川で、私の部屋から見えるのが天神川なんですけど、部屋からいつも水鳥を眺めていて、結構水とも距離が近いので、そのまま水が触れるところまで降りれるので、たまにビール飲みながら、白鳥も寄ってくるので、水鳥を見るために川に行ってるっていう。それが天神川がちょうどいい幅で、流れもゆったりなので、私は好きな場所です。

大島委員長: 伊藤さん、いいこと言ったねえ。水鳥もそうだけど、「水鳥の国際空港」とか言われてるんだよね。全世界からやってくるんだよね。天神川は、なんか今日の話でパッと天神川が出てきたんだけど、一回も出てこなかったんだけど、実はすごいポテンシャル高い気がした。というのは、例えば、みんな気遣いがあるわけじゃないですか。大橋川にしても、堀川にしても。だけど天神川って意外とニュートラルに、みんな生活の中にある川って感じがするんだよね。住宅にも近いし、住んでる環境のど真ん中にあるし、天神川の活用してもっと考えると色々できるかもしれないね。最後にね笑 坂田さん、どうでしょうか。

坂田委員: 僕は大島さん、鷺鷥さんと同意見です。

大島委員長: へへへ、やっぱりね笑 坪倉さんいかがですか。

坪倉委員:すごい意外だった、皆さん宍道湖とかじゃなくて、近場に行くんだなってというのが印象的だったんですけど、でも私もそうかもしれない。衝撃的なこと言うと、天神町にきてもう何年にもなるんですけど、宍道湖に夕日を見に行ったことが一回もないんですよ。もう忙しくて夕方笑 とてもじゃないけど夕日なんて見とられんっていうところがあって笑

大島委員長:今背景夕日じゃないですかそれ笑

坪倉委員:一応雰囲気としては笑 松江市さんに選んでいただいたんですけど笑

大島委員長:なんだ、皮肉だなあ笑

坪倉委員:でもやっぱり、天神川です。天神町にずっと事務所があったので、夜中に疲れてぼーっと川面を見たり、徹夜して...松江は東西に通っている川が多いので、朝見るとビル越しに朝日が見えて、夕方天神川のロータリーの端から見ると鉄道の高架と暮れていく水面が見えて。やっぱりその近さですね。水が触れるところなんて言いますが、この水辺に降りていけるので朝も通勤の時などに歩いてくるときなどは、飲んだ次の日などはあえて川の下の道を通ってみたりとか、やっぱそういうことができるあたりがすごく好きかもしれないです。

大島委員長:ありがとうございます。それぞれの水辺、頂きましたけれども、今日お時間にもそろそろなって参りまして、水辺自体の活用を「私たちの水辺・私たちの公共空間」って言い方をしましたけれども、私たちのものである以上、かなり主観的であっていいんじゃないかという風に思うんですね。水辺っていうと河川とかね、かなり土木の視点から、シビルエンジニアリングで、神の目線になりがちです。

おそらく行政の担当の方もそう思われているんだけど、市民の方から見たときの水辺っていうのはもっとパーソナルなものだし、そういった魅力が本来あるはずなので、そう言った、断片で構わないです、活用を考えていくっていうことが、自分たちの勝手にビジョンですよ、今日出ましたけれども、そんなことにつながっていくのかなと。それぞれの共感があると思います。水鳥好きはここから行こうよ、水面が好き人はこっちから行こうよとかね、夕日好きはこっちだ、とかね。ほんとに今日、ここだけでもいろんな視点が出てきて、そういうことかなと思いました。

僕は門外漢ではあるんだけど、いくたびにいろんな水辺の魅力を見つけています。ぜひですね、これを機会にそれぞれの方の視点を総合的に見た時に、それをどう捉えられるのかな、みたいなことをですね、ちょっと一旦私たちがまとめてみたいという気がしています。

ので、今日は一つのきっかけです。またさらに意見があれば、委員の皆さん、ご意見お寄せください。それから今日、オブザーバーとして視聴して下さった多くの方々もですね、すいません、ご発言されたい方もいらっしゃったかと思いますが、ぜひご意見があれば、感想も含めてお寄せいただければと思います。